

「李禹煥」展関連イベント

対話より—美術としての建築、建築としての美術

李禹煥×安藤忠雄

Dialogues: Architecture as Art and Art as Architecture

Lee Ufan×Ando Tadao

2022年12月25日（日）

兵庫県立美術館ミュージアムホールにて

安藤忠雄氏 プロフィール

建築家

1941年大阪生まれ。独学で建築を学び、1969年に安藤忠雄建築研究所を設立。イエール大学、コロンビア大学、ハーバード大学の客員教授、1997年から東京大学教授、2003年から同大学名誉教授を務める。プリツカー賞をはじめ国内外で数多くの受賞歴があり、2010年文化勲章受章。

「李禹煥」展の関連プログラムとして、各界の識者と李禹煥氏との連続対談「対話より」を行いました。第6回は安藤忠雄氏（建築家）をお招きしました。

お二人の対談は、2014年のヴェルサイユ宮殿での李氏の個展を見た時の安藤氏の印象から始まりました。歴史と伝統を背負った壮麗な空間での展覧会は想像を絶するような大変な仕事だったはずとの感想から、話題は安藤氏自身のフランスでの経験や、現代美術との出会いへと移ります。フランスで五月革命が起きた1968年当時、安藤氏は渦中のパリに滞在していたそうです。学生たちの抗議活動を目の当たりにして、フランス人というのは徹底的に戦うのだな、すごいものだ后感心したそうです。

2022年、南フランスのアールに李氏の作品を展示するための施設「李禹煥アール」が開館しました。その準備にあたっては、李氏から安藤氏に色々な相談があったとのこと。その完成した姿について安藤氏は、何もしていないように見えてそうではない、見る人に様々な事を考えさせる空間であると賛辞を送りました。そして、その魅力はなかなか写真ではわからない、写真をはるかに超えたものこそが美術の魅力なのだ、とも。

話題は安藤氏与李氏の協働によって誕生した香川県の直島にある李禹煥美術館へと移ります。福武總一郎氏から、世界でここだけにしかない美術館を作りたい、という夢を聞かされた安藤氏は、その情熱に打たれてベネッセハウスの設計を引き受けることになりました。

美術館というものは、アーティストだけではなく、クライアントに信念がないと成り立たないのだと安藤氏は言います。今では世界中から人々がやってくる直島も、開館して初めの5年間はほとんど人が来ず、現在のような活況を呈するまでには時間がかかったのだ、と。

李禹煥美術館にそびえる太さ40cm、高さ18mのコンクリート製の柱は、当初の計画にはなかったもので、李氏のアイデアによって加わったもの。技術的に難しいもので「私は本当は怖かった」と安藤さんは言います。しかし様々な困難を乗り越えて無事に完成した時には、素晴らしい空間になったと、関係者のみんなで喜びを分かち合ったそうです。「これはあって良かった。あれは李先生のポールやで」と言う安藤氏に、李氏は「後方にある安藤さんの建築、横に伸びる壁面の線があったから初めて考えたもの。縦の線を足して空間を動かそうとしたんです」と応じます。

李禹煥美術館は2010年に完成しましたが、その後も二人の協働は続きます。今ある直島のアーチも、ヴェルサイユ宮殿で試みたアーチの作品に直島でも挑戦したいと李氏が安藤氏に相談して実現したものとのこと。李氏は「フランスではできなかった存在感、想像力のあるものをつくりたい」と熱心に語られたそうです。「李先生は世界の宝」と安藤氏。そして李氏の作品は、その場に行って、作品のある空間で何を感じるか、それこそが大切な事だと言います。

安藤氏が、建築家は現実との折り合いをつけながら仕事をするが、芸術家はそれこそ命がけ。世俗的なことは二の次で常に芸術のことを考えているのではないかと問いかけると、李氏は、建築家も似たようなところがあるのではないですか？と返答。特に安藤氏は、必要性やそこに暮らす人の利便性を超越した建築を手掛ける、それこそ芸術家がやるようなことだと思う。直島の美術館も、安藤氏がいなければやらなかったろうと李氏は言います。

李禹煥美術館の置かれた場所は、もとは別の計画があったのを李氏の希望を受けて安藤氏が周囲を説得してくれたのだそうです。そしてアルルでも、文化財となっている建物には手を入れることができない、そんな難しい条件がある中、安藤氏が様々な助言をしてくれたことに大いに助けられたと。自分のこれまでの仕事を理解してくれている偉大な建築家が以心伝心の関係で近くにいてくれていることを誇りに思う、と李氏。

安藤氏は五月革命に揺れる1968年のパリでの思い出を話されましたが、李氏によれば李氏の今回の展覧会も1960年代末から1970年代にかけての激動の時代の経験が基点となっているとのこと。いったん壊す、外に出る。時に暴力的ともいえる抵抗の姿勢は李氏の活動のばねになったと言います。ものどもの、ものと空間の響きあい、ものを置くことで震えるような空間。呼びかけとしての制作。その過程を見せるような展覧会を目指したと李氏は言います。最近ようやくスタートラインに立ったような気持ちがしていると語る李氏に、長生きせなあきませんね、と安藤氏。

安藤氏は、具体美術協会の作家たちやモダンジャズ、ジョン・ケージや武満徹、河原温、

リチャード・セラといった芸術家たち、彼らの作品との出会いをふり返りながら、わからないものと出会うこと、そして「これはなんやろ」と自分なりに見る、考えるということが大切だと言います。学校の勉強と違って、芸術の見方は誰も教えてくれない。自分なりの見方、考え方を手に入れるために何度も見るのが大切なのだ、と。

安藤氏は兵庫県立美術館の円形テラスに置かれた李氏の作品に触れながら、あれを見ると「お！こんな風に使うのか。」と驚く。そういう風に好奇心を刺激されること、そうして鍛えられる知的体力こそ長生きの秘訣だと言います。この知的体力を鍛えるために美術、美術館があるのだと。並んでいる作品の全部を無理に見ようとしなくても、自分の心に引っかかる作品を探してみる、見つかったらそれをじーっと見る、目ではなく心で見ると。そういう見方をしても良いのではないかと言います。

「芸術家というのは四六時中、芸術のことを考えているのですか？」という安藤氏の問いに、李氏は「一つの癖みたいなものです」と答えます。「ちょっとおこがましい言い方かも知れませんが」と前置きしながら、「世界の一線に立って活動する芸術家というのはそれほど多くないのですが、そうしたもの同士には、ある共通意識のようなものが芽生えるんだと思う。たまに顔をあわせた時の様子、それは長々と話しをする必要もなく、何となくの表情や様子によって、お互いの最近の仕事に対するリアクションを送りあっているんです。だから一人でいる時も、次は、次は、と考えるようになる。一生懸命というのとも違うのだけれど、そういう生き方が癖になってしまった。安藤さんもそうでしょう？」と李氏。

「そんな大変な思いで生み出した作品を、ぱっと見せてもらえるのだから美術館というのはすごい場所ですね、一回見ておしまいではもったいない」と安藤氏。

河原温やリチャード・セラなど、お二人の共通の知り合いの芸術家の話題に及ぶと、李氏はリチャード・セラが「安藤は不透明な建築家だ」と言っていたというエピソードを紹介。不透明というのはある種のわからなさのことを言っているのだろうが、きっとセラは安藤氏の建築の魅力と同時に自分自身のことも言っていたのだろうと言います。

安藤氏は「わからない、わからないというけれど、偉大な芸術家たちの仕事というのはみんなわからんのです。わからないからこそ自分で考える。それこそが心の豊かさなのだ。自分たちとは違う人間がいる、それを知ることが大切なのだ」と応じます。「答えがあることを教える、ということと、考える、ということとはまったく違うことなのだ」と。

「本当にそうですね」と李氏。現代ではAIまで登場し、なにごとにも便利になっているが、それに従って間に合わせるのは非常にまずいと思う。しくじっても良いから考える、経験するということが大切です。美術、演劇、音楽、図書館。自分の体を使って経験する場の大切さ、わからないという未知性の中での経験こそ、展覧会というものの存在理由なのだと言います。「よくわからない、不透明な部分にぶつかったときに人は考え始める。展覧会はそのような場所なんです」と。

「李さんの作品を見ていると、音楽が聞こえてくるような気がしますね」と安藤氏は言い

ます。そういう時間をもてることが、美術館での体験だと思う。自分とは違う感性と出会う場。ヴェルサイユ宮殿は遠いかも知れないけれど、神戸の美術館は行こうと思えば、すぐそこです。今が絶好のチャンスなので、何度も足を運ぶこと。しっかり自分なりの距離感を持ちながら作品の前に立つことが大切なのだと安藤氏は熱を込めて語られました。

興味深いエピソードの数々に彩られたお二人によるお話は、緊張感を保ちながらお互いに尊敬の念を抱き合ってきたお二人の交流の豊かさを実感させるものでした。会場に笑顔のあふれるあっという間の一時間でした。

対談レポート：小林公（兵庫県立美術館 学芸員）

